

# 人を殺す犬

小林多喜二

青空文庫



右手に十勝岳とかちだけが安すツぽいペンキ画の富士山のように、青空にクツキリ見えた。そこは高地だったので、反対の左手一帯はちようど大きな風呂敷を皺しわにして広げたように、その起伏がズウと遠くまで見られた。その一つの皺の底を線が縫って、こつちに向つてだんだん上つてきている。釧路くしろの方へ続いている鉄道だった。十勝川も見える。子供が玩具にしたあとの針金のようにだった、がところどころだけまぶゆくギラギラと光っていた。——「真夏」の「真昼」だった。遠慮のない大陸的なヤケに熱い太陽で、その辺から今にもポツポツと火が出そうに思われた。それで、その高地を崩していた土方どかたは、まるで熱いお湯から飛びだしてきたよう

に汗まみれになり、フラフラになっていた。皆の眼はのぼせて、トロンとして、腐った鯁にしんのように赤く、よどんでいた。

ぼうがしら 棒頭ぼうがしらが一人走っていった。

もう一人がその後から走っていった。

百人近くの土方がきゆうにどよめいた。「逃げたなあ！」

「何してる！ ばか野郎、馬の骨！」

棒頭は殺気さつきだった。誰かが向うでなぐられた。ボクン！ 直接じかに肉が打たれる音がした。

この時親分が馬でやってきた。二、三人の棒頭にピストルを渡すと、すぐ逃亡者を追いかけるように言った。

「ばかなことをしたもんだ」

誰だろう？　すぐつかまる。そしたらまた犬が喜ぶ！

ました眼下の線路を玩具のような客車が上りになつてゐるこつちへ上つてくるのが見えた。疲れきつたようなバシユバシユという音がきこえる。時々寒い朝の呼吸いきのような白い煙をまる円くはきながら。

\*

その暮れ方、土工夫らはいつものように、棒頭に守られながら現場から帰つてきた。背から受ける夕日に、鶴つるはし尖やスコツプをかついでゐる姿が前の方に長く影をひいた。ちようど飯場はんばへつく山を一つ廻りかけた時、後から馬の蹄ひづめの音が聞えた。捕つかまつた、皆そう思い立ち止まつて、振り返つてみた。源吉だった。

源吉はズブ濡れの身体からだをすっかりロープで縛られていた。そし

てその綱の端が棒頭の乗っている馬につながれていた。馬が少し早くなると（早くするのだ）逃亡者はでんぐり返つて、そのまま石ころだらけの山途やまみちを引きずられた。半纏はんてんが破れて、額ほおや頬から血が出ていた。その血が土にまみれて、どす黒くなっている。皆は何んにも言わないで、また歩きだした。

（体を悪くしていた源吉は死ぬ前にどうしても、青森に残してきた母親に一度会いたいとよくそう言っていた。二十三だった源吉が、二日前の雨ですっかり濁つて、渦うずを巻いて流れていた十勝川に、板一枚もって飛びこんだということはあとで皆んなに分った）

\*

\*

飯がすむと、棒頭が皆を空地に呼んだ。

まただ！

「俺ア行きたくねえや……」皆んなそう言った。

空地へ行くと、親分や棒頭たちがいた。源吉は縛られたまま、空地の中央に打ちぶせになっていた。親分は犬の背をなでながら、何か大声で話していた。

「集まったか？」大将がきいた。

「全部だなあ？」そう棒頭が皆に言うのと、

「全部です」と、大将に答えた。

「よよし、初めるぞ。さあ皆んな見てろ、どんなことになるか！」

親分は浴衣ゆかたの裾すそをまくり上げると源吉を蹴けった。「立て！」

逃亡者はヨロヨロに立ち上った。

「立てるか、ウム？」そう言つて、いきなり横ツ面を拳固げんこでなく  
りつけた。逃亡者はまるで芝居の型そっくりにフラフラツとした。  
頭がガツクリ前にさがった。そして唾つばをはいた。血が口から流れ  
てきた。彼は二、三度血の唾をはいた。

「ばか、見ろいッ！」

親分の胸がハダけて、胸毛がでた。それから棒頭に

「やるんだぜ！」と合図あいずをした。

一人が逃亡者のロープを解いてやった。すると棒頭がその大人  
の背ほどもある土佐犬を源吉の方へむけた。犬はグウグウと腹の  
方でうなっていたが、四肢ししが見ているうちに、力がこもってゆく



のが分った。

「そらッ！」と言った。

棒頭が土佐犬を離した。

犬は齒をむきだして、前足をのばすと、尻の方を高くあげて：  
：源吉は身体をふるわしていたが、ハツとして立ちすくんでしま  
った。瞬間シーンとなつた。誰の息づかいも聞えない。

土佐犬はウオツと叫ぶと飛びあがつた。源吉は何やら叫ぶと手  
を振った。盲目めくらが前に手を出してまさぐるような恰かつこう好をした。

犬は一と飛びに源吉に食いついた。源吉と犬はもつれあつて、二、  
三回土の上をのたうった。犬が離れた。口のまわりに血がついて  
いた。そして犬は親分のまわりを、身体をはねらしながら二、三

回まわった。源吉は倒れたままちよつとの間ピクツピクツと動いていた。がフラフラと立ち上った。と土佐犬は吠えもせず飛びかかった。源吉はひとたまりもなくはね飛ばされて、空地を区切っている塀に投げつけられた。犬はまたせまった！ 源吉は犬の方に向きなおった。そして塀へいに背をもたせ、背中ですつて立ち上った。皆んな思わずその方を見た。こつちに向けた顔はすっかり血だらけで分らなかつた。その血が顎あごから咽喉のどを伝つて、すつかりムキだしにされて、せわしくあえいでいる胸を流れるのが分かつた。立ち上ると源吉は腕で顔をぬぐつた、犬の方を見定めようとするようだった。犬は勝ち誇つたように一吠え吠えすると、瞬間、源吉は分けの分らないことを口早に言つたか、と思うと、

「怖おっかない！ オツ母ツ！」と叫んだ。

そしてグルツと身体を廻すと、猫ねこがするのように塀をもがいて上るような恰好をした。犬がその後から喰らいつた。

\*

\*

その晩棒頭が一人つき添って土方二人が源吉の死骸しがいをかついで山へ行つた。穴をほつてうずめた。月夜で十勝岳が昼よりもハツキリ見えた。穴の中にスコップで土をなげ入れると、下で箱にあたる音が不気味に聞えた。

歸りに一人が、ちようど棒頭の小便をしていた時、仲間「だが、俺アなあキツトいつかあの犬を殺してやるよ……」と言つた。



# 青空文庫情報

底本：「日本文学全集」<sup>3</sup> 小林多喜二 徳永直集」集英社

1967（昭和42）年12月12日発行

入力：林 幸雄

校正：浅原庸子

2005年1月16日作成

2014年8月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 人を殺す犬

小林多喜二

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>